

現代日本語における三人称代名詞「彼(女)」に関する一考察

ソムキャット チャウエンギツジワニツシュ

0. 研究目的・範囲・データ

一旦文章 (discourse) に導入された名詞句を再び指すには様々な形式が用いられる。の中で、本稿は、現代日本語における、単数を表す三人称代名詞が実際の文章でどのように用いられているのかを考察していくのが目的である。

日本語には三人称代名詞が存在するかどうか、意見が分かれるところではあるが、奥村 (1954) 等のように現代日本語では「彼」「彼女」¹が実際に使用されていることは否定できないだろう。また、筆者が行った調査でもそれが裏付けられる²。したがって、取りあえず本稿は日本語では三人称代名詞として「カレ」が存在すると考え、特に「登場人物の重要度」(後述) という観点から考察を進めることにする。

指示表現の体系を解明するには、三人称代名詞だけに限らず、より広い視野に立ち、指示詞も考慮に入れて考察を行わなければ明らかにできないが、紙幅のため、本稿は必要最小限の指示詞についてふれることにする。

データについては、エッセイをデータ資料として分析する。ある効果を上げるために様々な特殊な文体が使われる小説とは異なり、エッセイはかなり自然な言葉で書かれていると考えるからである。また、作者によって個性、文体が異なってくることもあるので、本研究は特定の作者に偏らず³、一人の作者につき1-5本のエッセイをデータにする。文章に導入された要素を指すのに用いられる形式⁴を約2,000例(固有名詞、職業名詞、親族名詞、普通名詞、それぞれ約500例) 集め、エッセイ160本(作者:90人)である。データにしたエッセイは全て現代のもので、ここ二、三年に書かれたものが殆どであり、古くてもこの十年以内に書かれたものである。

1. 先行研究

「カレ」の使用については様々な研究がなされてきたが、社会言語学的な観点からのものが殆どである。「談話管理理論」という観点から田窪 (1990a, 1990b)、金水・田窪 (1990) などが非常に面白い現象を指摘しているが、それは主に話し言葉を対象にしており、書き言葉については殆ど触れていない。

少数の研究の中、柳父 (1982) は「カレ」の使用について次のように述べている。

『「彼」が、特定の人物、主人公だけを指すことばだ。』(柳父1982: 207)

確かに「カレ」が極めて限られた人物に対して使用されることは認めるが、実際にデ

一タをみると、次のような例も少なからず存在する。

(1) (ある占い師⁵のことを長く述べ続けてきた。)

ちょっと考えると、この人の言ってることは、チグハグのように思われるかもしれません。占い師が悩むのはおかしい、なぜ自分の人生を占うことができないのか、と。けれど、僕はそうは思わない。このチグハグさが、誠実さのあらわれだと思います。

その昔、平林たい子という作家が、長いこと新聞で人生相談を担当していた。彼女の夫はプロレタリア作家の小堀甚二で、夫婦には子どもがいなかった。

(佐木隆三「孤独に捕まらない人間の絆」『しぶとさの自分学』)

(1)では、「ある占い師」のことが最初から最後まで述べ続けられるので、一般の人の感覚では、この占い師こそがエッセイの主人公と思うだろう。しかし、それにも関わらず、この例のように、単に一時的に現れる人物を指すのに「彼女」が用いられることは少なくない。

柳父のいうように、「カレ」が主人公を指すためにしか使われないのは本当なのか、また、厳密に言えば「主人公」という概念は未だに客観的に規定されていないなど、様々な疑問が残っている。

2. 「主役」「一時的な主役」「わき役」について

本章は、客観的にエッセイに登場する人物を三種類に分け、「主役」、「一時的な主役」、「わき役」と仮に呼ぶことにする。⁶⁷ (本調査はエッセイをデータとして分析したため、「主人公」の代わりに「主役」という用語を使う。) 次に、「カレ」が各々の種類の人物と如何に関わっているのか、その使用割合も含めて検討する。

2.1 「主役」

一般的に「主役」とは、その文章の中で主に述べられる人物と理解されるだろう。本節では、Givón (1983) の唱えた“Persistence” (主題の持続性⁶⁸) というパラメータを用い、「主役」という概念を定義する。

まず「主題の持続性」について、Givón は、“It is a reflection of the topic’s importance in the discourse, and thus a measure of the speaker’s topical intent.” と述べ、即ち、後続する文章での名詞句の重要度を示す値で、後方照応的主题性の指標となるものである。簡単にいえば、「主題の持続性」の値は、ある名詞句の指示対象について述べられる、後続の連続した節の数として表される値のことであろう。日本語においては、節の数え方は研究者によって様々であるが、今回は、砂川 (1995) のように、連体修飾を節の数に加えない、又、引用句は引用された部分の節の数がいくつであっても引用動詞を含めた全体を一つの節として数えることにする(その理由は後述)。そして、その名詞句が省略される場合でも数えるという立場をとる。

次に、「主題の持続性」の値の数え方について、用例に即した形で述べることにする。

(2) ⁽¹⁾私のアパートの隣の部屋には、アメリカの市民権がとりたくてアメリカ人と結婚し、パスポートをやりながら食っているメキシコ人もいたのである。

⁽²⁾そのアパートはきたないだけでなく、⁽³⁾とても古い。

⁽⁴⁾化粧をベタベタと塗ったバアさんが持ち主であり、⁽⁵⁾我が隣人は、そのバアさんの娘と結婚して、⁽⁶⁾ {Ø} ずっとアメリカに住んできた。⁽⁷⁾ {Ø} 年はまだ28歳と若い男であった。

(下付きの数字は節の番号を表す。以下、同様。)

まず、「メキシコ人」の場合は節(1)で導入され、次の節(2)では述べられていないので、「主題の持続性」の値はゼロとなる。しかし、節(5)で再度言及され、今度は節(6)(7)にわたって述べられているので、「主題の持続性」の値は2である。したがって、この文章での「メキシコ人」の「主題の持続性」の値は合計2(0+2)となる。一方、「バアさん」の場合は、節(4)で導入され、(5)で述べられるのみであり、その後全く言及されていないので、この文章での値は1となる。

このように、ある文章の中で、ある名詞句の指示対象について述べられる、後続の連続した節の数を数え、その文章で値が最も大きい人物を「主役」と考える。いうまでもないが、私小説では、書き手が「私」という観点から述べるので、「私」は「主題の持続性」の値が最も大きいのが、本研究での「主役」(後述する「一時的な主役」「わき役」も含めて)は書き手である「私」を排除して考える。即ち、書き手である「私」の観点からみて、「主題の持続性」の値が最も大きい人物を「主役」と考えるわけである。

なぜ連体修飾を数に入れないのか、その理由を次に述べたい。例をみよう。

(3) ⁽¹⁾その手前の歩道に一人の男が立っていた。⁽²⁾ {Ø} なかなかのファッション・センスの持ち主である。⁽³⁾ {Ø} バリッとしたスーツがよく似合う。

⁽⁴⁾回送板を揚げた私の車は、その男の前を通過して⁽⁵⁾新宿を回ってみた。

(3)の例では、第二段落での「回送板を揚げた」は「私の車」を修飾しているが、この連体修飾を節と数えるとすれば、節(3)「バリッとしたスーツがよく似合う」と節(5)「その男の前を通過して」との間に節(4)が入り込み、(3)と(5)が連続しなくなり、「主題の持続性」の値がゼロになる。しかし、節(4)はこの文章では、依然「歩道に立っていた一人の男」を主題として述べ続けており、節(4)は単に「私の車」を修飾するのみで、別の主題について述べたり、元の主題の持続性がなくなったりするわけではない。「主題の持続性」を考える際に、節(4)のような連体修飾を節の数と数えれば、このようなデメリットが生ずる可能性があるため、本稿では、とりえず連体修飾を節の数とは数えないことにする。

また、引用句の場合も、同じ様なことが考えられる。

(4) そして、彼女は「そうだね。どこに行こうかしら。ちょっと考えさせて」と言った。まったく、困った女だなあ。

引用句を考える際、その中にいくつの節が入っていても引用動詞も含めて一つの節として数えるのは、引用句に含まれている節が文章の主題の持続性に貢献するとは考えないからである。即ち、引用句で多く述べられているとしても、例えば、(4)の例を文章全体

から考えれば、単に「彼女は……と言った」という部分にすぎず、偶然その場面での人物が多く話ただけと考え、その文章における重要な人物として述べられているとは考えにくく、上述のような数え方を採用することにした。

2.2 「一時的主役」「わき役」

文章によっては、「主役」の他に、文章全体の主役ではないが、しばしばある場面に限って極めて重要な人物として扱われることがある。本稿では、仮にそのような人物を「一時的主役」と呼んでおく。

「一時的主役」は、文章全体での「主題の持続性」の値が「主役」より少ないが、その文章の中で、ある部分だけその値が相対的に高い人物と考える。このような「一時的主役」は二種類に分けられる。

- a. ある場面に限って、文章全体の「主役」が「主役」としてではなく、単なる普通の人物として述べられ、その代わり、ある特定の人物が一時的に主役として述べられる場合、この「場面における主役」を仮に「一時的主役」と呼ぶ。例えば、

(5) (父のことが述べ続けられてきた。)

銭湯に行く、と行って出ていったきり何か月も帰って来なかった父が、きれいな洋館の中に納まっているのを見て、狐につままれた気分になっていた。父が、他人のような気がしたものだ。

父は上がれ、とも言わずに、ただ私を眺めていた。家の中から出てきた金髪のドイツ人の娘が私に向かって笑いながら何かいった。当然、外国語が理解できるはずのない私は、ポケットとしていた。

彼女は私をまじまじと見つめ、首を傾けて、アナタノナマエハ？と日本語で訊いた。そう語りかけたのだと分かったのはずいぶん経ってからで、そのときは彼女のアクセントが強く、何をいったのだからよくききとれなかった。

(高橋三千綱「金髪の娘、女風呂、陰毛、父の喧嘩のこと」

『あの時好きだと言えなかったオレ』)

(5)では、文章全体では主に「父」のことが述べられており、「父」は「主題の持続性」の値が最も大きい。無論、「娘」よりもその値が大きい。但し、書き手は自分が「金髪のドイツ人の娘」に会った場面を描写する時は、「父」については少ししか触れず、主に「娘」のことを語る。「娘」の「主題の持続性」の値はこの場面では、「父」より高いので、この場面に限って「娘」は「主役」となり、文章全体の「一時的主役」をつとめているといえよう。

- b. 既に挙げた(1)の例のように、文章全体では主に占い師について語っているが、一部分だけ同じような状況にあった一人の作家のことを思い出し、その作家について主に語る場面では、その作家がその場面の「主役」で、文章全体の「一時的主役」をなしていると考え。a. と違うのは、b. で「一時的主役」の現れる場面では文

章全体の「主役」が全く言及されないことである。もう少し(1)の例の続きをみてみよう。

(1a) ちょっと考えると、この人の言ってることは、チグハグのように思われるかもしれません。占い師が悩むのはおかしい、なぜ自分の人生を占うことができないのか、と。けれど、僕はそうは思わない。このチグハグさが、誠実さのあらわれだと思えます。

その昔、平林たい子という作家が、長いこと新聞で人生相談を担当していた。彼女の夫はプロレタリア作家の小堀甚二で、夫婦⁹には子どもがいなかった。しかし、小堀さんは別に所帯を持っていて、その女性が子を産んでいた。それがずいぶん前からだったことが発覚したわけです。

このとき平林さんは、ずいぶんからかわれましたね。

「人生相談で、他人に立派なご託宣をのたもうておきながら、自分の亭主がこんなに長く別な女とつき合っ、隠し子がいたことに気がつかないとは……」

それに対して平林さんが、どう答えたのかは忘れましたが、(略)

上例のように、文章全体の「主役」である「占い師」とは関係なく、別の人物だけが中心に述べられる場合も「一時的主役」と考える。

このように、一つの文章には通常文章全体の「主役」は一人しかいないのに対し、「一時的主役」はそのような制限がない。つまり、全くない場合も、一人以上存在する場合もあり得るわけである。

最後に、「わき役」は「主役」でもない、「一時的主役」でもない人物と考えることを記しておく。「わき役」の例としては(1a)の例における「小堀甚二」や同じ例の7行目の「その女性」が挙げられよう。(1a)では両人物とも「主役」としても「一時的主役」としてもつとめていないので、「わき役」に分類されるわけである。

2.3 「主役」「一時的主役」「わき役」と「カレ」

次に、実際のデータで「カレ」がそれぞれの人物を指す際にどのように用いられるのか、みてみよう。

表 1a-c から明らかなように、「カレ」は「主役」を指すのに約34%も用いられるのに対し、「一時的主役」では約15%しか用いられない。一方、「わき役」では極めて低い割合でしか用いられないことがわかった。また、名詞の種類別にみても、同様な傾向がみられる。特に、「カレ」の使用が最も多い普通名詞の場合にその差が極めて大きいことが認められよう。

「主役」が「カレ」で示される例には以下のようなものがある。

(6) そんな彼女たちが、昼間、あちこちの部屋へ集まっているという。彼女の関心事は、その中のひとりの浮気話だった。¹²夫以外に、男をつくった女が、近所の女たちを集めて、あるいは集まった中で、その恋人の話をするらしい。彼女の口ぶりでは、どうやらその女は、恋をしたことが自慢のようだ。(「彼女」=「主役」、男をつ

表1a: 「主役」の場合

名詞の種類	総回数 ¹⁰	「カレ」の回数 ¹¹
固有名詞	423	90 (21.28%)
職業名詞	297	60 (20.20%)
親族名詞	127	18 (14.17%)
普通名詞	319	233 (73.04%)
合計	1166	401 (34.39%)

表1b: 「一時的な主役」の場合

名詞の種類	総回数	「カレ」の回数
固有名詞	58	5 (8.62%)
職業名詞	176	25 (14.20%)
親族名詞	100	14 (14.00%)
普通名詞	101	24 (23.76%)
合計	435	68 (15.63%)

表1c: 「わき役」の場合

名詞の種類	総回数	「カレ」の回数
固有名詞	22	1 (4.55%)
職業名詞	80	1 (1.25%)
親族名詞	267	1 (0.37%)
普通名詞	79	10 (12.66%)
合計	448	13 (2.90%)

くった女」= 「わき役」

(高橋洋子「女友だちと私の分かれ道」『ひとり遊びをときどき』)

(7) ミンクのロングコートを身に纏った30代とおぼしき女。そして、女友達一人。

深夜の午前3時だった。助手席の白いヘッドレストのカバーに右手を掛けて乗りしな、私の顔を見て、「アッ!」「ハイ!どうぞ」2キャラット以上の大粒ダイヤモンドが、その薬指に光り輝いている。

やがて、発進。「二人で、コーヒーを飲んで来たのよ」そういう彼女の額にみるみる玉の汗が噴き出す。「どうしたのよ、あなた」気づかう友人。「だって、運転手さん、ジャーニーズでしょう」「そうだよ」赤信号。大きく振り向いて、彼女と眼を合わせる。(「女」= 「主役」、「女友達」= 「わき役」)

(立花正太郎「プッシーキャッツ」『ハイ!どうぞ』)

(6)(7)ともに二人の人物(しかも、両方とも性別が同じ)について述べられているが、「主役」を指すのに三人称代名詞「彼女」が用いられ、一方、「わき役」の場合は、指示語句か、連体修飾を伴う名詞句が用いられている。

次に、「一時的な主役」で、「カレ」が用いられるのはどういうものだろうか。調べた結果、その「主題の持続性」の値は様々で、今回のデータでは、最も高いのは30節、最も低いのは2節である。平均値は7.49である。

値が大きいものには、既に挙げた(5)の例が挙げられ、一方、値が小さいにもかかわらず、「カレ」が用いられる例は、次の例が挙げられよう。

(8) 引率でついできた私の母親は、もちろんグルグルパーマではありませんでした。

彼女はサンリオショップになど興味があるわけがなく、{~~〇~~}買い物が終わるまで近

表 2 : 「一時的主役」の「主題の持続性」の値の分布

値	2	3	4	5	6	7	8	9	11	13	14	17	18	21	30
例の数	3	7	7	6	2	2	1	3	2	3	1	1	1	1	1

くの喫茶店にいてと言つて {Ø} 不在です。欲しいものがあったても、ねだりようがありません。

(酒井順子「金持ちという生きもの」『ギャルに小判』)

(8)のように、「主題の持続性」の値が小さいにもかかわらず、「カレ」を用いて指示できるのは主にb.の場合の「一時的主役」である。つまり、その場面では、他の登場人物について語られることがなく（したがって、他の人物の値はゼロ）、その「一時的主役」だけが述べられる場合である。また、値が小さくみえる理由として、「一時的主役」は普通その文章の一部でしか述べられないものなので、その一部が短ければ、当然「一時的主役」の値も小さくなるということが挙げられる。但し、小さくても、他の人物と話の内容面で競争してはいないので、明らかにその場面の「主役」だといえよう。

「わき役」の場合で、「カレ」を用いて指すのはどのような場合だろうか。13例中、10例が「ボーイフレンド」「ガールフレンド」という意味で用いられている。あと3例中、(9)のような固有名詞は1例で、(10)(11)のような、書き手が見知っている要素は2例である。

(9) (中野重治という人について述べ続けてきた。)

この時とは別に、まだ坂井郡高椋村一本田であった中野重治の生家を訪ねたことも三度か四度あったろう。「梨の花」によって描かれた家のあったとき、そして地震によってその家が倒れ、新しい家になったとき。このときまでは重治の妹の詩人、中野鈴子がその家に住んでいた。その鈴子の没後、庭に彼女の詩碑が建ち、その詩碑を見るのにも行った。(「中野重治」=「主役」、「中野鈴子」=「わき役」)

(佐多稲子「中野重治と郷土」『思うどち』)

(10) いきさつはこうである。古川君の友人に私も何度か会ったことがある女流詩人がいる。彼女の知人が、少女期に肺を病んで琴似の療養所に入所していたことがある。(「古川君」=「主役」、「彼女の知人」=「一時的主役」、「女流詩人」=「わき役」)

(佐々木逸郎「蛭」『シナリオ稼業』)

(11) 今回の旅行は、友達と二人で出かけたのですが、現地でもう二人の友達と合流することになっていました。その二人とは、一人は私達と同い年の友達、もう一人は彼女のお姉さんである「Uちゃん」です。(「Uちゃん」=「主役」、「私達と同い年の友達」=「わき役」)

(酒井順子「つかう」『ギャルに小判』 p. 84)

3例とも省略不可能である。(9)のように、指示対象が固有名詞の場合は、対象を客観的に指す際にソはあまり使われず¹³、そのまま繰り返すか、「カレ」が用いられる。(9)の場合同じ名詞句を繰り返せば、くどく感じられるので、それを避けるために「カレ」を用いるのだと考えられる。一方、(10)(11)の場合は、話し手が知っている要素にソを用いると、

心理的に自分から遠ざけるような印象を与えてしまう¹⁴ので、ソより「カレ」が好まれると考えられる。

このように、「カレ」の使用は「(文章中の)登場人物の重要度」と極めて深く関わっており、つまり、専ら「主役」「一時的な主役」を指すのに用いられ、基本的には「わき役」には用いられないことが明らかになった。

ところで、「カレ」が用いられない場合、代わりに何が用いられるのだろうか。普通名詞以外、即ち、固有名詞、職業名詞、親族名詞にはそのまま名詞句を繰り返し使うことが圧倒的に多い¹⁵が、連体修飾や指示語句コノ・ソノを伴う名詞句などもみられる。特に英語などの場合と異なり、注意すべき点は指示語句「ソノ」の用法であろう。つまり、英語では三人称代名詞 he, she などが用いられるのが一般的なのに、日本語では三人称代名詞「カレ」が好まれないために、代わりに「ソノ」が用いられるという現象である。(6)の「わき役」の場合もその一つの例であるが、「主役」の場合でも「カレ」が避けられ、その代わり「ソノ」が用いられることがある。但し、それは(12)のように、導入された指示対象の伴う情報が少なく、読み手にとってその要素がまだ曖昧な場合に限る。

- (12) 昔、私の家に強盗が入ったことがあった。その人は何も取らずに逃げて、翌日私に脅迫電話をかけて来た。逆探を恐れて、公衆電話から公衆電話へと移りながら13通もかけて来るうちに、彼は私とすっかり仲良くなり、私の家の防犯設備の不備な箇所を教えてくれさせた。(「強盗」=「主役」)

(曾野綾子「或る文化戦争」『大説でなくて小説』)

調査の結果、(12)のように初めて文章に導入され、その後「カレ」が用いられず、ソを伴い、指示される傾向がみられることがわかった。その後、様々な情報を与えることにより、読み手はその指示対象のことを知るようになり、続いて「カレ」が用いられると考えられる。勿論、直接「カレ」で指してはいけないということはないが、実際に調べたデータではこのような傾向が極めて強い。一方、固有名詞で導入される場合は、今回扱ったデータに限ると、このような使い方は全くみられない。「カレ」で指されるか、省略されるのが一般的である。それは、固有名詞を用いることにより、読み手が個人的にその要素を知らなくても、ある特定の人を指すということが明確になっており、例えば、「田中」なら、「田中」という人を指すのだ、とその存在がごくはっきりしているので、「カレ」が用いられやすいと考えられる。(13)はその例である。

- (13) ある日、40歳代の女性、よし子さん(仮名)が病院の相談室を訪れました。彼女は、食事が食べられず元気が出ないうえに、めまいやふらつきのために家事を行うこともままなりません。(「よし子さん」=「主役」)

(坂本真佐哉「素人のおせっかい、玄人のおせっかい」『こころの日曜日3』)

3. まとめ

以上、エッセイでの三人称代名詞「カレ」の使用について考察してきたが、「カレ」は「登場人物の重要度」と深く関わっており、極めて限られた人物を指すのに用いられるという傾向が明らかになった。

日本語では、読み手が十分その要素の存在を認知できる（と、書き手が想定する）場合、または、その要素が「主役」「一時的な主役」として述べられる場合以外では「カレ」が用いられにくい。逆にいえば、読み手の、その要素に対する親しみが相対的に深くなり、書き手・読み手ともに共通に知っている要素となっはじめて「カレ」が使えるといえよう。つまり、「カレ」ばかりでなく、指示詞も含め、書き手は相手の知覚や知識を考慮に入れて言語形式を選ぶわけである。今回はエッセイに限って調べたので、文章一般について同様の傾向があるかどうかは今後研究する必要があるが、少なくともこの傾向はエッセイのみならず、対話においてもみられるようである。

対話の場合、現場指示では、話し手から指示対象までの遠近感だけでなく、金水(1990)のいうように、話し相手の存在、知覚まで仮定しなければ、適切な指示詞を選べないのである。換言すれば、話し相手から現場がどのように見えているかということ仮定してから、どの言語形式を使うかを決めるわけである。また、対話での文脈指示では、例えば、「裸名詞句」（名詞句をそのまま何も付けずに使う）、三人称代名詞「彼」「彼女」を使うには、話し相手の知識を想定し、相手も共通にもっている知識がない限り、突然裸名詞句や三人称代名詞を使うことができない¹⁶。このように、日本語では相手の存在、知識などを意識し、それを想定しないと、言語形式が決まらないといえよう。

田窪(1988)は、日本語の場合、対話では聞き手の知識を常に意識するため、談話構造が話し手・聞き手のいる言語場から独立したものになりにくいと述べたが、対話だけでなく、エッセイのような文章の場合も同様といえよう。但し、指示表現に限らず、他の現象についても同様のことがいえるかどうかは、もう少し慎重にみてみなければならぬ。

引用文献

- 奥村恒哉 1954 「代名詞『彼、彼女、彼等の考察』—その成立と文語口語」『国語国文』23巻11号
金水 敏 1988 「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学(国文篇)』第39号 大阪女子大学国文学研究室
金水 敏 1990 「指示詞と談話の構造」『言語』Vol. 19 No. 4 大修館書店
金水 敏・田窪行則 1990 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』第3巻 講談社
坂原 茂 1991 「フランス語と日本語の限定表現の対応」『対照研究・指示語について』平成3年度筑波大学学内プロジェクトによる助成研究(B) 研究成果報告書
砂川有里子 1995 「談話主題の導入形式に関する研究ノート—存在文とコピュラ文の特立提示機能について—」『文藝言語研究 言語篇』1995-28 筑波大学文芸・言語学系
田窪行則 1988 「日本語の特徴について」『留学生のための日本語論』神戸大学教育部
田窪行則 1990 a 「対話における知識管理について—対話モデルからみた日本語の特性」『アジアの諸言

- 語と一般言語学(崎山理・佐藤昭裕 編集代表)三省堂
 田窪行則 1990 b 「対話における聞き手領域の役割について—三人称代名詞の使用規則からみた日中英名語の対話構造の比較」『認知科学の発展』第3巻 講談社
 柳父 章 1982 「彼・彼女」『翻訳語成立事情』岩波新書
 Burusphat, Somsong. 1986. "The structure of Thai narrative discourse." Ph. D dissertation. University of Texas at Arlington.
 Givón, T. 1983. Topic continuity in discourse : an introduction. in et al. (Eds) *Topic continuity in discourse : a quantitative cross language study*. Amsterdam : John Benjamins.

例文出典

- 『あの時好きだと言えなかったオレ』 高橋三千綱 1987 太田出版
 『思うどち』 佐多稲子 1989 講談社
 『ギャルに小判』 酒井順子 1994 フレーベル館
 『こころの日曜日3』 菅野泰蔵編 1994 法研
 『シナリオ稼業』 佐々木逸郎 1987 北海道出版企画センター
 『しぶときの自分学』 佐木隆三 1992 青春出版社
 『大説でなくて小説』 曾野綾子 1992 PHP 研究所
 『ひとり遊びとときどき』 高橋洋子 1993 PHP 研究所
 『ハイ! どうぞ』 立花正太郎 1993 マガジンハウス

¹以下、「彼」「彼女」をまとめて「カレ」と記す。

²紙幅のため表を全て載せられないが、筆者が行った調査では、一旦文章に導入された人物を指すには「カレ」が23.52%用いられる。特に、普通名詞で導入された人物の場合は「カレ」の使用率が最も高く、53.51%に及ぶ。

³作者の性別・年齢などは全く考慮されていない。

⁴つまり、名詞句の繰り返し、連体修飾を伴う名詞句、導入された名詞句と異なる名詞句<例、田中は逮捕された。被告は…>、指示語句を伴う名詞句、三人称代名詞。但し、「省略」を除く。

⁵用例中同じ人物が二度以上述べられる場合、同じ人物と同じ種類の線(一重線か点線)を付す。

⁶物語の登場人物を“Main Participant” “Secondary Participant” “Tertiary Participant”に分けるのは、Burusphat (1986)でもみられるが、本稿での分類のしかたと少々異なる。

⁷いうまでもないが、一つの文章に「主役」「一時的な主役」「脇役」の三種類が必ず登場するとは限らない。

⁸以下、「主題の持続性」と呼ぶ。

⁹ここでの「夫婦」は、「平林たい子」「小堀基二」の二人を指すものと考えている。

¹⁰ある人物を指す際には、三人称代名詞の他に、名詞句、指示詞などを使い、指示することがある。「総回数」とは、そのような明示的な(overt)形式の回数の合計のことである。例えば、今回扱ったデータでは、固有名詞で導入された人物を指すために用いられる形式、具体的には名詞句の繰り返し、導入された名詞句と異なる名詞句、連体修飾を伴う名詞句、指示語句を伴う名詞句、三人称代名詞が用いられた回数は、合計423回であった。

¹¹『「カレ」の回数』とは、三人称代名詞「彼」「彼女」が用いられる回数のことである。

¹²用例中の「/」は段落の切れ目を表す。

¹³指示対象が固有名詞で導入された場合は、「その人」などの形式で指示されることは今回の調査では全くみられない。これは恐らく「ソノ」で指される対象はその存在が未だ曖昧であるという感じを読み手に与え、固有名詞のような、どの人物を指すのか、その存在が極めてはっきりしている場合には用いられるにくいと考えられよう。但し、「その人」で指されることがなくても、「その+固有名詞」はしばしばみられるが、これは「先行文脈での情報付加」のためにあえて「ソノ」を使っているものと考えられる。「先行文脈での情報付加」の用法については坂原(1991)を参照。

¹⁴例えば、

例 (キティという人は書き手の小学生の時の友達だったが、その後書き手が長崎から東京に移り、キティの情報は何も入らなくなった。一方、キティの同僚の夫というつながりで、Hさんはキティと知り合った。また、そのHさんは書き手がキティの知り合いだったことを知って、キティのことを教えにきた。)

少女のときの仲良しの消息を聞き、大人になったその人の写真も見せてもらって、私にはそれが身近におもえたから、キティその人も現存しているような感じになっているのだが、キティはもう亡くなったとのこと。

(佐多稲子「幼な友達のその後」『思ううち』)

上の例では、書き手は少女の時のキティしか知らず、大人のキティは自分には馴染みがない、むしろ、キティのことを知っているHさんやキティの夫の勢力範囲にあるとみなし、「ソノ」を用い、距離をおいて述べるという印象を与える例である。そして、キティの写真を見せてもらって、はじめて身近に感じることに對比させ、故意にこのような言い方をしていると考えられる。

¹⁵調査では、名詞句の繰り返しの使用率がそれぞれ67.4%、53.53%、72.67%となった。

¹⁶詳しくは金水 (1988)、田窪 (1988、1990 a、b) などを参照。

(Somkiat CHAWENGKIJWANICH 筑波大学大学院 博士課程文芸・言語研究科
応用言語学)